往生とは何か（3）

自己の往生／他者の往生

親鸞仏教センター嘱託研究員　青柳　英司

1、はじめに

（1）寺川俊昭「難思議往生を遂げんと欲う」

「不虚作住持功徳」とは何か。それは安楽浄土の功徳の根本と了解されたものです。その意をとって言えば、「不虚作住持功徳」が現に今はたらいている境界を、『大経』は安楽浄土と呼ぶのである、そういう了解を許すはずです。…中略…

すると、浄土の功徳を体験しているということは、視点を変えれば、浄土が功徳という形をとって私に開示されたということです。浄土の開示を得た生だから、往生といって何のためらいもない。…中略…浄土が開示された生を得た、しかも誓願の不思議によって。ほぼこういうような喜ばしい感動を得られまして、二種の回向によって恵まれた難思議往生、それは正定聚に住して涅槃無上道に立った人生でありますけれども、そこに立って自分は人間としての責任を果たすのだと、覚悟して生きていかれた。…中略…「無辺の生死海を尽くさん」、そういう志願を感得して、そこに自分の業を果たす安らかな道をいただくのだ。このような覚悟を「難思議往生を遂げんと欲う」という言葉で、おそらく親鸞聖人は表白なさったのであろうかと思います。…中略…往生を単純に死後に追いやる、そういう痩せた往生理解に立ち止まるということは、聖人の教えをいただく者としていかがであろうかと、反省することでございます。

（中略引用者『真宗研究』44〔真宗連合学会、2000 年〕219-220 頁）

（2）三木悟『現世往生という迷い』（中外日報社、2019 年）

真宗の僧侶になろうと決意した時、わたしは二つのことを誓いました。その内の一つは、釈の三文字以外の法名をお付けしないということ。もう一つは、親が死にゆく際に、「必ずお浄土に生まれられるのだから安心していいよ」と言うことのできる僧侶に成ることでした。（ｉ頁）

「現世往生」を説く人々は、「死んでからの話ではなく」とか、「生きている今が大事なのだ」とか、「死後に救いを待つような信心ではなく」ということを言う。…中略…

しかし、だからといって、人が死なない身になったわけではない。死の問題、死後の問題は、依然として人間の強い関心事であり続けている。「生死いづべき道」は、現代人においても人間のアルティメット・コンサーン（根源的関心）なのであり、この問題に正面からとりくみ、そこに浄土往生という解答と確信を見出した先人たちの真摯な営為を、無にしていいはずはないのである。浄土教の誕生以来、七高僧によって、また親鸞

聖人によって開顕された来世往生の教えを正しく頂戴しつつ、「現生正定聚」の意味を掘り下げること。そこに、現在の浄土真宗が直面する、困難な課題を切り拓く道があるにちがいない。（34-35 頁）

→「往生」という言葉で考えようとしている問題が、そもそも違う。

2、救済の現在性

（1）「信巻」現生十種の益

金剛の真心を獲得すれば、横に五趣・八難の道を超え、必ず現生に十種の益を獲。何者か十とする。一つには冥衆護持の益、二つには至徳具足の益、三つには転悪成善の益、四つには諸仏護念の益、五つには諸仏称讃の益、六つには心光常護の益、七つには心多歓喜の益、八つには知恩報徳の益、九つには常行大悲の益、十には正定聚に入る益なり。

（『聖典』240-241 頁）

（2）『一念多念文意』

「摂護不捨」ともうすは、「摂」は、おさめとるという、「護」は、ところをへだてず、ときをわかず、ひとをきらわず、信心ある人をば、ひまなくまもりたまうとなり。まもるというは、異学異見のともがらにやぶられず、別解別行のものにさえられず、天魔波旬におかされず、悪鬼悪神なやますことなしとなり。「不捨」というは、信心のひとを、智慧光仏の御こころにおさめまもりて、心光のうちに、ときとしてすてたまわずと、しらしめんともうす御のりなり。…中略…「此亦是現生護念」というは、このよにてまもらせたまうとなり。本願業力は信心のひとの強縁なるがゆえに、増上縁ともうすなり。信心をうるをよろこぶ人をば、『経』（華厳経）には、「諸仏とひとしきひと」と、ときたまえり。（中略引用者『聖典』538 頁）

（3）『御消息集』（善性本）

浄土の真実信心の人は、この身こそあさましき不浄造悪の身なれども、心はすでに如来とひとしければ、如来と申すこともあるべしとしらせ給え。弥勒すでに無上覚にその心さだまりて、あかつきにならせ給うによりて、三会のあかつきと申すなり。浄土真実の人もこのこころをこころうべきなり。光明寺の和尚の『般舟讃』には、「信心の人はその心すでに浄土に居す」と釈し給えり。居すというは、浄土に、信心の人のこころ、つねにいたりというこころなり。これは弥勒とおなじくということを申すなり。これは等正覚を弥勒とおなじと申すによりて、信心の人は如来とひとしと申すこころなり。

（『聖典』591 頁）

（4）『末燈鈔』

真実信心の行人は、摂取不捨のゆえに、正定聚のくらいに住す。このゆえに、臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心のさだまるとき、往生またさだまるなり。来迎の儀式をまたず。（『聖典』600 頁）

（５）『唯信鈔文意』

「自来迎」というは、「自」は、みずからというなり。弥陀無数の化仏、無数の化観音、化大勢至等の、無量無数の聖衆、みずからつねに、ときをきらわず、ところをへだてず、真実信心をえたるひとにそいたまいて、まもりたまうゆえに、みずからともうすなり。

（『聖典』548 頁）

（６）『讃阿弥陀仏偈和讃』

仏慧功徳をほめしめて　　十方の有縁にきかしめん
　信心すでにえんひとは　　つねに仏恩報ずべし　　（『聖典』483 頁）

（７）「信巻」所引『往生礼讃』

仏世はなはだ値い難し、人信慧あること難し。たまたま希有の法を聞くこと、これまた最も難しとす。自ら信じ人を教えて信ぜしむ、難きが中に転た更難し。大悲、弘く普く化する、真に仏恩を報ずるに成る、と。　　（『聖典』247 頁）

３、死と死者

（１）『親鸞聖人御消息集』

明法御坊の往生のこと、おどろきもうすべきにはあらねども、かえすがえすうれしうそうろう。　　（『聖典』560 頁）

（２）『末燈鈔』

この身はいまはとしきわまりてそうらえば、さだめてさきだちて往生しそうらわんずれば、浄土にてかならずかならずまちまいらせそうろうべし。　　（『聖典』607 頁）

（３）「信巻」真仏弟子釈

念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるがゆえに、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す。

（『聖典』250 頁）

（４）『御消息集』（善性本）

また、「真実信心うる人は　すなわち定聚のかずの〔に〕入る　不退の位に入りぬればかならず滅度をさとらしむ」（大経讃）と候うは、この度この身の終わり候わん時、真実信心の行者の心、報土にいたり候いなば、寿命無量を体として、光明無量の徳用はなれたまわざれば、如来の心光に一味なり、このゆえ「大信心は仏性なり、仏性はすなわち如来なり」（涅槃経）と仰せられて候うやらん。これは、十一・二・三の御誓と心得られ候う。罪悪の我等がためにおこしたまえる大悲の御誓のめでたく、あわれにましますうれしさ、こころもおよばれず、ことばもたえて申しつくしがたき事かぎりなく候う。

（『聖典』583 頁）

（５）『高僧和讃』源空章

阿弥陀如来化してこそ　　本師源空としめしけれ
　化縁すでにつきぬれば　　浄土にかえりたまいにき　　（『聖典』499 頁）

諸仏方便ときいたり　　源空ひじりとしめしつつ
　無上の信心おしえてぞ　　涅槃のかどをばひらきける　　（『聖典』499 頁）

命終その期ちかづきて　　本師源空のたまわく
　往生みたびになりぬるに　　このたびことにとげやすし　　（『聖典』499 頁）

粟散片州に誕生して　　念仏宗をひろめしむ
　衆生化度のためにとて　　この土にたびたびきたらしむ　　（『聖典』499 頁）

（６）『一念多念文意』

諸仏のよよにいでたまうゆえは、弥陀の願力をときて、よろずの衆生をめぐみすくわんとおぼしめすを、本懐とせんとしたまうがゆえに、真実之利とはもうすなり。

（『聖典』542 頁）

（７）「行巻」所引『五会法事讃』

万行の中に急要とす。　　迅速なること、浄土門に過ぎたるはなし。
ただ本師金口の説のみにあらず。　　十方諸仏共に伝え証したまう。

（『聖典』180 頁）

（８）「信巻」所引『観経疏』

また十方仏等、衆生の釈迦一仏の所説を信ぜざらんを恐畏れて、すなわち共に同心・同時に、おのおの舌相を出だして遍く三千世界に覆いて、誠実の言を説きたまわく、汝等衆生、みなこの釈迦の所説・所賛・所証を信ずべし。一切の凡夫、罪福の多少・時節の久近を問わず、ただよく上百年を尽くし、下一日・七日に至るまで、一心に弥陀の名号を専念して、定んで往生を得ること、必ず疑いなきなり。このゆえに、一仏の所説をば、すなわち一切仏同じくその事を証誠したまうなり。　　（『聖典』217 頁）

（９）『親鸞聖人御消息集』

諸仏称名の願ともうし、諸仏咨嗟の願ともうしそうろうなるは、十方衆生をすすめんためときこえたり。また、十方衆生の疑心をとどめん料ときこえてそうろう。

（『聖典』581 頁）

（10）『御消息集』（善性本）所収「浄信書簡」

また、第十七の願に「十方無量の諸仏にほめとなえられん」とおおせられて候う。また、願成就の文に、「十方恒沙の諸仏」とおおせられて候うは、信心の人とこころえて候う。

（『聖典』588 頁）